

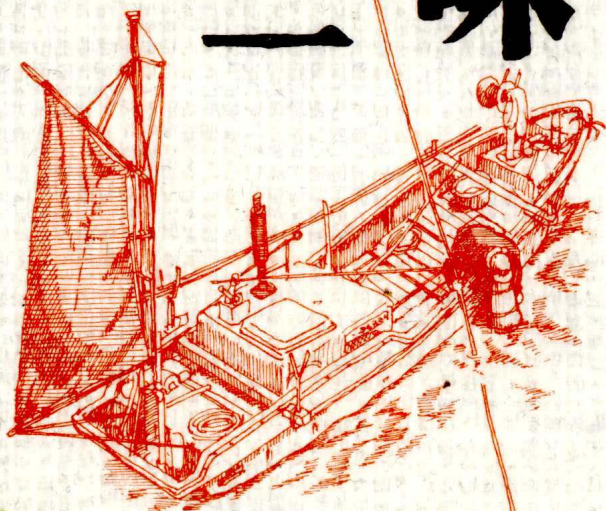
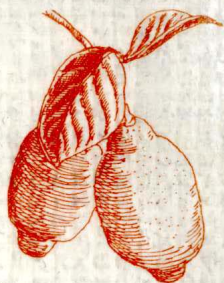
岩本 隼

こうやつ
房州香漁師町暮らし

ゴンズイ

GONZUI ZANMAI

三味



新潮社

岩本 隼

ゴングズイニ味

房州香漁師町暮し

新潮社



ゴンズイ^{ざんまい}三味——房州^{ぼうしゅう}香(こうやつ)漁師^{りょうし}町暮^{まちぐら}し

著 者 ^{いわもと}岩本 ^{じゆん}隼

発 行 1996年 8月10日

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替00140-5-808

電話：編集部 (03) 3266-5411

読者係 (03) 3266-5111

印刷所 株式会社光邦

製本所 株式会社大進堂

© Jun Iwamoto 1996, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-413201-2 C0095

価格はカバーに表示してあります。



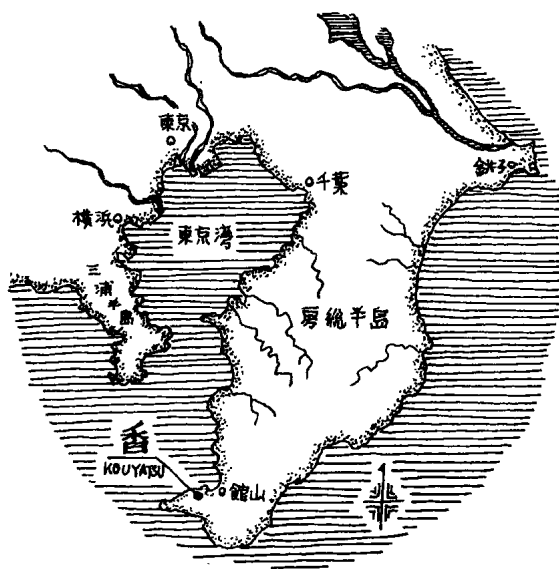
ゴンズイ三昧——房州香(こうやつ)漁師町暮らし*目次

クマキチさんとガマグチ……………	113
新しい根……………	99
レモンと夏ミカン……………	86
親方の死……………	77
春の食卓……………	65
治郎兵衛商店で歴史の勉強をする……………	51
釣船第六菊地丸……………	36
ノリの帰郷……………	25
プロローグ……………	7

ゴンズイ三昧	127
「猫の手」	139
坂田の仲間たち	154
鉄砲と山芋	168
ヒデさんの見突き	185
フグチリとバンド	200
あとがき	216

本文イラストと装画*作場知生
装幀*新潮社装幀室

ゴンズイ三昧——房州香(こうやつ)漁師町暮し



プロローグ

生れて初めて見た海は、多分、日本海だった。

一九四六年（昭和二十一年）、五歳の夏に、満州からの引揚げ船の上から見た海である。満州のハルピンから無蓋車に乗り、何日もかけて大陸を移動した。汽車は赤茶けた広野の真ん中で理由もなく停り、理由もなく走り出して、「乗り遅れる」という言葉を、このときに覚えた。

「あ、誰々さんがいない。乗り遅れた」

父はハルピンでソ連軍に連れて行かれ、母と兄二人のわが家四人は、幸い誰一人乗り遅れることなく船に乗ることができたが、乗船したのがこの港だったのかは聞いていない。だから、どの航路をたどって来たのかも判らないわけだが、上陸したのは舞鶴だったと母が言っていたので、日本海だったのだろう。

初航海で覚えているのは、親切な船員がコーリヤン飯のお焦げをくれたことと、甲板から眺める海に、満月のようなクラゲがたくさん浮かんでいたことだけである。

それからずっと東京住まいで、次に見た海は、初めて釣りに行った東京湾の東雲あたりだったと記憶している。兄と二人でハゼを釣った。

小学校二年のときに、初めて泳ぎを覚えた海は、横須賀の馬堀海岸だった。父の知り合いが横須賀の山の上に住んでいて、夏休みに遊びに行ったのだ。地元の子供たちとふざけながら山を降り、京浜急行に乗って行って、フンドシで泳いだ。浜辺で拾った貝殻をボール箱に敷いた綿の上に並べて、夏休みの宿題にした。沖に猿島が浮かぶ、遠浅のいい海岸で、その海には何年か通った。

中学から大学にかけては、江ノ島や七里ヶ浜、材木座、大学の寮のある伊豆の戸田^{へだ}や宇佐美にときどき行った。江ノ島や鎌倉の海は、外海は波が高いなあぐらいで特別の感慨はなかったが、沼津から東海汽船で行く戸田は、面白い海だった。駿河湾に面しているながら子宮のように奥深い入江になっているので、右側は湖みたいに静かな海面、左は渦巻く駿河湾が一望できたのだ。水泳部だったので、どこかの高校の遠泳の監視役で湾内をグルグル泳いだ。ハマユウやら何やら、いろんな植物の名前を水泳部の後輩が教えてくれたが、忘れてしまった。

卒業してから一度、初夏にこの浜を訪れたとき、地元のサンマ船が出漁する光景に巡り合えた。

寮の管理をしている地元の娘が赤ん坊を抱いて堤防から手を振ると、南下していく船から大音量の歌が流れてきた。それが森進一の『港町ブルース』だったことは後で知った。そしてそれから森進一が好きになった。

そのときぼくは、その寮に女と滞在していて、別れる、別れないで揉めていたので、偶然かいま見た、絵に描いたような漁港の別れの風景が、鮮烈に心に残ったのだ。

その女とは結局結婚して、ほどなくして別れた。

そして、女のこととまだアクセクする前、大学を留年して将来のことなんかろくに考えずに呑気に暮しているときに出会ったのが、コウヤツの海だった。

終の住処となったコウヤツである。

香と書いてコウヤツと読む。

房総半島、千葉県館山市の一部落である。

東京の知人が、館山で新しく始めた民宿に一家で行くので一緒にいかが、と誘ってくれたのだ。もう三十年も昔のことである。まだ房総西線と呼ばれていた汽車が両国を起点に走っており、館山まで四時間ぐらいかったのではなかっただろうか。

館山は明治大正のころから文人墨客が保養に訪れていた土地で、東京あたりの臨海学校も多い海水浴場であることは知っていたが、ぼくらがその夏訪れた宿は、同じ館山でも、夏の海の賑わいからはおよそ外れた辺鄙な場所にあった。

夜、真つ暗な浜辺で火花をしてはしゃいでいると、ステテコ姿の男がヌツと現れたかと思つたら、

「気の荒いのもいるから、騒がんほうがいいぞ」

と言いいいて、また闇の中に消えていった。宿に帰って聞くと、その浜の上に番屋という建物があつて、香の定置網・喜久丸の漁船員が二、三十人寝泊りしているということだった。が、それくらい、地元の間も海水浴客には慣れていなかったのだ。

翌日見に行くと、海岸ふちの古びた瓦屋根の軒にカップやゴム手袋が無造作に干してあり、

庭の外流しの周りにはカボチャやナスやトウガラシが育ち、炎天下にヒマワリが誰にも見られることなく咲いていた。道路際の小さな平家は漁協の事務所と駄菓子屋になっていた。

早起きして漁港に行くと、沖から波を蹴立てて戻ってきた喜久丸の船団が右に旋回してピタッと岸壁に横付けされるや、ひと抱えもありそうなブリが次々に運び出されて秤にかけられ、氷詰めになされてゆき、番屋の男たちが荒々しく立ち回って観光客を畏怖させる。

都会からノホホンとやってきたひ弱な連中なんか寄せつけない強烈な潮の匂いが満ち満ちていた。

房総半島の西の端の館山市は、ちょうどバールの先端のように、ほぼ直角に館山湾を抱えている。昔から海水浴場として知られてきた北条海岸や館山海岸は、その縦の部分に位置しているが、ぼくが訪れた香は、折れ曲った横の部分にあった。

つまり、北条や館山の海は西に開いているのに対し、こちらの海は北にある。北条海岸からはほぼ正面に富士山が望めるのに、こちらの水平線にあるのは三浦半島であり、正面に見えるのは久里浜の火力発電所の三本煙突である——というように、海の景色からしてガラッと違っているのだが、違いは風景だけではなかった。

そもそも、香部落が館山市に組み入れられたのは、ぼくが行く十年ちよつと前のことで、それまでは他の十三の部落とともに安房郡西岬村にしきまという村だったのだ。そして、北条や館山の海岸が、背後に市街地を背負ったただの長い砂浜であるのに対し、旧西岬村の海はもっと入り組んでおり、もっと生活臭に満ちていた。それぞれの部落が小さな入江と浜と漁港を持ち、そこでは漁師が伝馬船を操り、背後の山にいたる狭い土地では百姓が米や野菜を作り、

といった昔ながらの半農半漁の営みを、まだ色濃く残している土地だったのだ。

生活している海。

村に固有の海。

そのことが、この海がぼくを惹きつけた第一の要因だったのかもしれない。

自分の故郷というものを持たず、都会の片隅で頭の中を半端な文学や哲学で満たして漠然と生きている人間に、鮮烈な癒しのサインを送ってくれたのだと思う。

実際、この土地に初めて降り立ったときの印象は、それまでの旅では味わったことのない鮮烈なものだった。

茅葺きや黒い瓦屋根の民家のあい間に棕櫚の太木が暑苦しげに葉をひろげ、夏ミカンがたわわに実り、田では稲が黄色く色づき、防風のトウジイの細かい葉がキラキラ輝きながら風に揺れて、空にはカラスやトンビが舞っている。

何よりも陽射しが違った。伊豆の海と緯度はそれほど変わらないはずなのに、南洋の異境にきたような空気の色だった。

そして、海。

なんの変哲もないただの海。

見捨てられ、忘れ去られたような海。

しかし、それがぼくを虜にした。

西側は陸地が張り出して、小漁師の船曳場と喜久丸の堤防になっているが、あとは何もな
い砂浜である。

海は夏の陽射しの下で、わずかに湾曲したその砂浜を、ただ静かに洗っていた。

入っていくと、足の指の一本一本まで見えるほど澄んだ潮である。ずいぶん先まで遠浅で、それから徐々に深くなっていたが、深みに身を沈めても、海は、年上の女のように鷹揚に包み込んでくれて、潜っていても、地上にいるのと同じように自由に振る舞えそうな感じだった。

あ、これはオレのために用意されていた海だと、なぜか確信させるものがあつた。

安心して身をまかせて、イルカのように跳んだり潜ったりした。

そして、そうやって戯れているうちに、今まで気が付かなかった新しい楽しみを、この海は教えてくれた。

海の中の豊かさである。

それまで幾つかの海には行っても、仲間とはしゃいだり泳いだりするばかりで、海中をつぶさに観察したのはこの海が初めてだったのだ。それは、その頃ちように出回り始めたマスク型の海中眼鏡とシュノーケルを東京から持参したせいもあったが、何よりも、この海の親しみやすさと透明度が、その気を起させてくれたのだった。

潜行して、稲田のような緑の海草の上を巡回する。その海草の陰に蠢くカニや、砂の上を不器用に移動するヒトデを眺め、眼前を素早く横切るキスや名も知れぬ魚のあとを追う。こちらはずいぶん浮上して息つきをしなくてはならないが、そんな不便を意識させないほど豊かな魅力ある世界だった。

しかし、そのうちに、見て追っ掛けているだけでは物足りなくなつた。

こいつらを何とかつかまえてみたい。
でも、それには道具が要る。

当時、香には、漁協の駄菓子屋のほかに、店屋は二軒しかなかった。切手やハガキを扱う駄菓子屋の小池商店。この店の売り物は、庭でカキ氷が食えることである。そしてもう一軒が、酒・タバコ・雑貨を扱う治郎兵衛商店だった。味噌、醤油からマッチや便所紙までひとりの日用品を揃えた、まあ、香の総合百貨店だったが、その片隅に、ちゃんと銚もり（地元ではヘシと呼んでいたが）も陳列されていたのだ。竹の柄に三ツ又の尖った金具の付いた、あれである。きつと、西岬地区にも民宿が出来始めたというので、目先の利いた問屋が置いてあったのだろう、浮輪やビーチサンダルと一緒に飾ってあったのだ。銚一本、百円ぐらいだったか。

その銚で最初に突いたのが、動きの鈍いカニではなく、アナゴだった。

たまたま海底に沈んでいた太い孟宗竹の穴に、何か黒く蠢くものが見えたので、ゴムを思い切り引き絞ってやみくもに銚を放つたら、細長い魚が巻きついていて、興奮して宿に持ち帰ると、アナゴだと教えられたのである。おかみさんが蒲焼にしてくれた。

以来、アナゴ突きに熱中し、海底の砂から首だけ出しているところを狙い撃ちする技を覚えて何匹もつかまえるようになったし、メゴチやホウボウ、そしてすばしこいキスやボラも時には突くほどになった。

とはいっても、その頃はもちろん、自分がとった獲物の名前なんか、ほとんど知らなかった。みんな宿のおかみさんが教えてくれて、その上、調理して味わわせてくれたのだ。

ぼくらが泊っていた民宿は、田村という屋号の家で（この辺の住民は同族結婚のせいで同じ苗字が多いので、それぞれ各戸に伝わる屋号で呼んでいた）、先祖は元禄時代に紀州から地引網の技法を伝えた家系だそうで、爺さままではその地引網の網元をしていたという由緒ある家だった。ぼくらが行ったときは、その爺さまは隠居の身分だったが、今の旦那は喜久丸漁業の幹部らしく、水揚げのとき、あの気の荒い番屋の男たちを堤防でいろいろ指図していた。

そんな骨の髄まで漁業に染まったような一家である、香の海のことなら何でも知っているから、ぼくの初歩的な質問にも笑いながら色々と教えてくれた。その点でも、ぼくは恵まれていたと言えるだろう。

以来、ぼくのコウヤツ通いが始まった。

コウヤツ狂い、と言ったほうがいいだろうか。結婚した年の一年を除いては、欠かさず繰り返されることになったのだ。

大学を出て放送局に勤めるようになってからも、休みを限度一杯に取って潜りに来た。真っ黒い顔で東京に戻って地下道を歩いていると、何か間違った場所に降り立ったような気分になったものである。この海辺の一週間のために、残りの日々が回っている感じだった。

就職した放送局は結局一年で辞めてしまったので、次の年からは、また心おきなくコウヤツの海を堪能できるようになった。翻訳の下請、就職情報誌のコピー書き、座談会原稿の整理、などといった雑多な仕事を引き受けて生活はカツガツだったが、その代り時間は自由になったから、夏の香滞在も大幅に延びた。そしてちょうどいいことに、その年から民宿・田村が貸ポートを始めることになり、ぼくをポート番に雇ってくれたので、一石二鳥、趣味と